

令和3年度中野区学力にかかわる調査の結果について

1 調査の趣旨

- 各学校において、自校の児童・生徒一人ひとりの学習状況や学年の傾向を踏まえて、教育課程や指導の改善・充実を図る。
- 調査の結果を基に児童・生徒が自身の学習上の課題を認識し、その後の学習に役立てる。
- 各教科の目標や内容に照らした学習の実施状況を把握し、区内小・中学校における教育課程の実施状況についての課題を明らかにして教育委員会の施策及び事業に生かす。

2 本年度からの変更点

- 学習指導要領の改訂によって、小学校及び中学校1年生の評価の観点が国語、算数・数学ともに「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に変更された。このことにより、今年度は小2～中1の評価の観点を変更した。
- 令和3年度より社会と理科の2教科を実施しないこととした。
※これまでの調査実績を分析した結果、社会と理科の調査問題については知識・技能のみを問う傾向が強く、新学習指導要領を踏まえた学習内容を測ることが難しいと判断した。
- 分析に同一母集団の経年変化を入れ、学習の実施状況や教育課程の実施状況について分析を行った。

3 調査の実施概要

- (1) 対象学年及び教科 ※ 調査範囲は前年度の学習範囲

学年	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
対象人数(人)	1704	1716	1621	1549	1629	1086	1010	990
国語	○	○	○	○	○	○	○	○
算数・数学	○	○	○	○	○	○	○	○
英語							○	○

- (2) 実施方法 ペーパーテスト形式による調査
(3) 実施時期 令和3年4月12日～16日の中で1日

4 調査の方法・内容

- (1) 本調査では、学習指導要領の目標、内容の学習状況を把握するため、教科の観点ごとに問題を作成する。
- (2) 出題した学習内容や問題の形式、難易度等を考慮し、あらかじめ「おおむね満足である状況」を示す数値を「目標値」として設置した。この目標値に到達した児童・生徒の割合(達成率)を基に、学習状況を把握する。
※教育委員会は、達成率が70%であれば、区内の70%の児童・生徒が、「おおむね満足できる状況」にあることを示しており、全ての教科の全ての観点の達成率を70%以上にすることを目指している。
- (3) 今年度の調査より、学習指導要領の改訂によって評価の観点が変更されたことや実施教科を国語、算数・数学、英語としたことから、項目数が令和2年度までの86項目から44項目に変更となった(表1)。

【表1】各学年の評価の観点と項目数

	観 点	小2	小3	小4	小5	小6	中1	観 点	中2	中3	教科 と項目数
国語	「知識・技能」	○	○	○	○	○	○	「話す・聞く能力」	○	○	20
								「書く能力」	○	○	
	「思考・判断・表現」	○	○	○	○	○	○	「読む能力」	○	○	
								「言語についての知識・理解・技能」	○	○	
算数・ 数学	「知識・技能」	○	○	○	○	○	○	「見方や考え方」	○	○	18
	「思考・判断・表現」	○	○	○	○	○	○	「技能」	○	○	
								「知識・理解」	○	○	
英語								「外国語表現の能力」	○	○	6
								「外国語理解の能力」	○	○	
								「言語や文化についての知識・理解」	○	○	
評価項目数		4	4	4	4	4	4		10	10	44

5 調査結果の分析

(1) 目標値を達成した項目数の割合について

【表2】目標値に達した児童・生徒の割合が70%以上の項目数の経年比較

年 度	平成31年度	令和2年度	令和3年度
項目数	48/86	62/86	36/44
目標値を達成した項目数の割合(%)	55.8	72.1	81.8

①全教科全項目のうち達成率が70%以上のものは、44項目中36項目で、昨年度、一昨年度に比べ達成した項目数の割合が増加した。区内の児童・生徒の学力が順調に高まっていることがうかがえる。

②目標値を達成した項目数の割合が80%を超えていることから、基礎的・基本的な知識及び技能や課題を解決するための思考力、判断力、表現力等は概ね育まれていると考えられるが、未達成の児童・生徒の学力の向上に向けて個別の支援に取り組んでいくことが必要である。

(2) 観点ごとの達成率について

【表3】令和3年度 観点ごとの達成率

<国語> 令和3年度 観点ごとの達成率

観 点	小2	小3	小4	小5	小6	中1
「知識・技能」	80.5	73.3	71.9	70.1	78.7	69.8
「思考・判断・表現」	65.9	66.9	61.0	67.9	71.7	74.7

観 点	中2	中3
「話す・聞く能力」	80.5	81.3
「書く能力」	81.2	90.9
「読む能力」	82.7	79.6
「言語についての知識・理解・技能」	68.2	77.5

<算数> 令和3年度 観点ごとの達成率

観 点	小2	小3	小4	小5	小6	中1
「知識・技能」	88.4	79.1	82.3	78.4	77.1	71.5
「思考・判断・表現」	78.1	70.9	65.0	72.2	72.6	71.9

観 点	中2	中3
「見方や考え方」	71.4	68.0
「技能」	78.7	77.0
「知識・理解」	73.6	70.6

<英語> 令和3年度 観点ごとの達成率

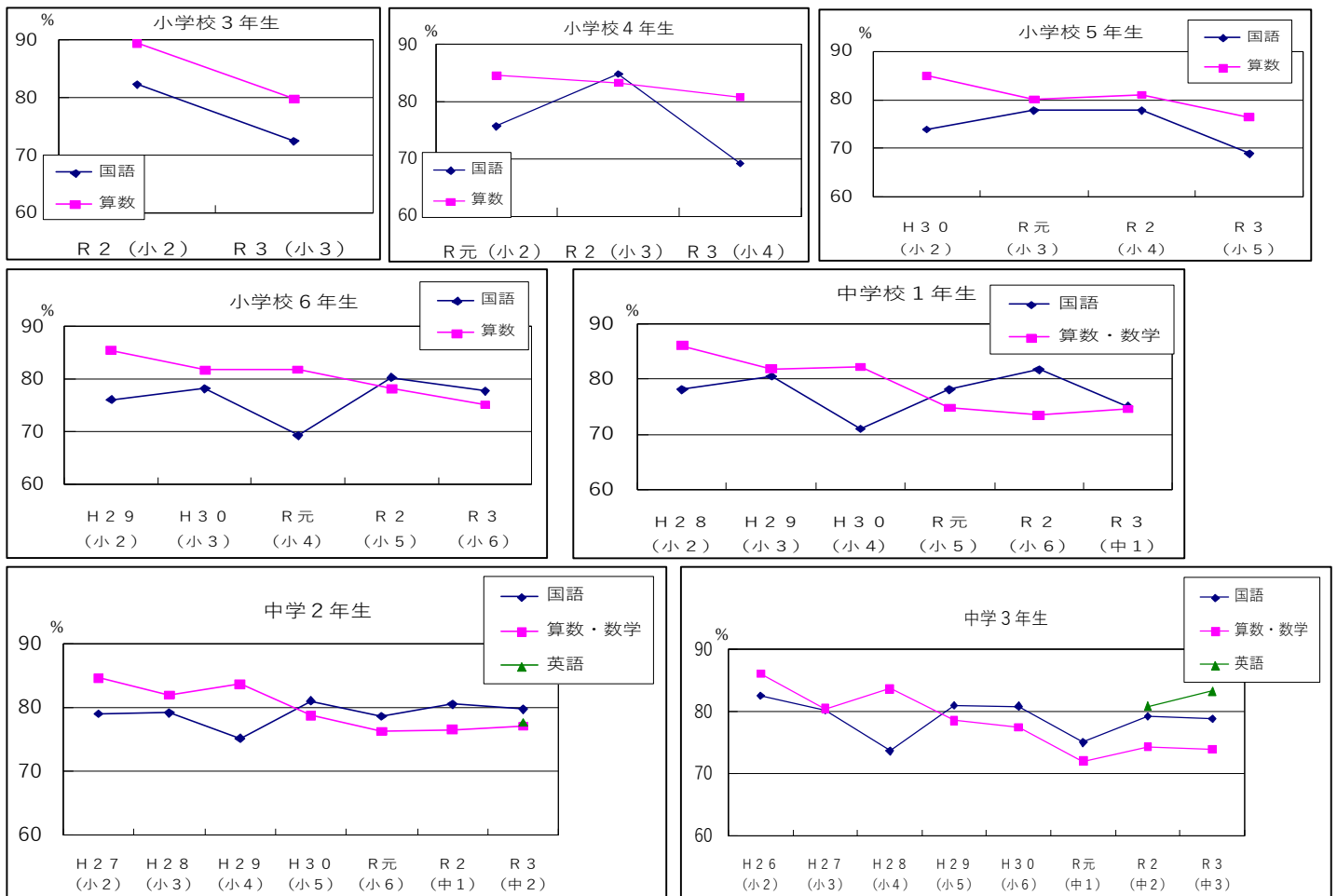
観 点	中2	中3
「外国語表現の能力」	74.9	77.6
「外国語理解の能力」	77.1	86.5
「言語や文化についての知識・理解」	75.0	76.2

※網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。
 ※小学校2年生～中学校1年生は、新学習指導要領の施行に伴い、評価の観点が変更になっている。

- ①教科ごとに見ると、国語は20項目中14項目、算数・数学は18項目中16項目、英語は6項目中6項目となった。このことから、算数・数学、英語では、小・中学校の学習が定着していることが分かる。
- ②小・中学校ともに、「知識・技能」や「知識・理解」については達成率70%を達成している学年や教科が多いが、小学校の国語で「思考・判断・表現」の達成率が低い。小学校の国語の授業において、言語活動を通して自分の思いや考えを書いたり、話したりして伝え合う力を高める授業を充実させていくことが必要であると考えられる。
- ③小・中学校全ての教科で、記述形式の問題の達成率が低く、無解答率も高い傾向にあるため、「思考・判断・表現」の達成率が低くなっている。全ての教科において、自分の考えを形成する学習過程を重視することが必要であると考えられる。

(3) 同一母集団の達成率の経年変化について

【図1】同一母集団の経年変化（達成率）



- ①国語については、小学校4年生時の達成率が下がっている学年が多い。中学年の学習の重点である、筋道立てて考える力や豊かに想像する力、自分の思いや考えをまとめる力を身に付けられるようにしていくことが課題である。
- ②算数・数学については、小学校5年生からの達成率が下がる傾向がある。小学校4学年からの学習をいかに定着させていくかに課題がある。
- ③小学校では全学年、昨年度と比較して達成率が下がっている。新型コロナウイルス感染症対策のため、人と関わり合う活動が制限され、自分の思いや考えを伝え合う活動が十分に行えなかった影響があったと考えられる。

6 今後の対応

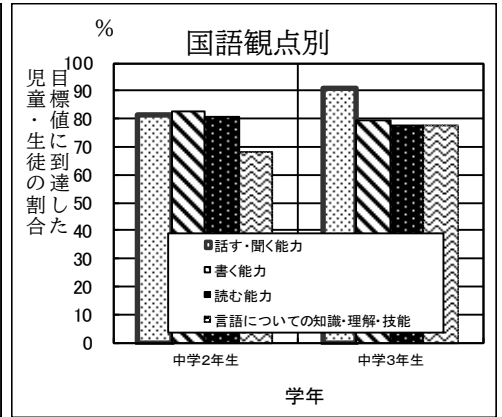
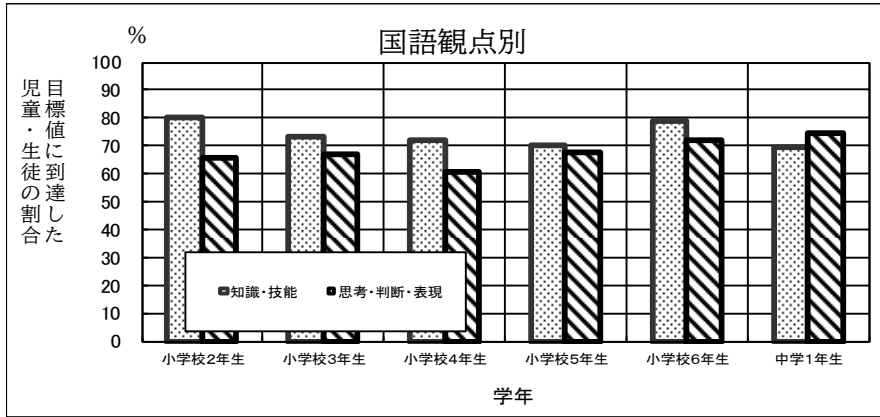
- (1) 本調査は、全ての項目で目標値を達成することを目指している。「新しい中野をつくる10か年計画」(平成28年4月、中野区)では、経過目標として成果指標と成果指標の目標値を示したが、本年度の時点で達成率が成果目標である80%に到達した。
 今後は、「中野区基本計画」(令和3年9月)に示されているように、児童・生徒が確かな学力を身に付けることができるよう、一人1台端末を効果的に活用して一人ひとりの習熟状況を把握し、個に応じた指導や補充学習等の一層の充実を図る。
- (2) 課題となる学年、教科の学力の定着に向けて、習熟度別少人数指導の編成の工夫、教科担任制、任期付短時間勤務教員等を活用した指導方法や指導体制を整えられるよう区全体の調査結果を周知し、指導・助言を行う。
- (3) 教員研修では、課題となる学年や教科の指導に関する内容が充実するように努める。また、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図り、各教科の見方・考え方に迫る授業を行う中で、自分の考えや意見を記述する力を育成する。
- (4) 新型コロナウイルス感染症の影響で活動が制限された中でも、ICT機器やデジタル教材の活用によって、基礎的・基本的な知識・技能については定着させることができていた。今後は、一人1台端末を効果的に活用して「知識・技能」「知識・理解」の習得を行いながら、授業においては、対面で協働して学ぶ「協働的な学び」を大切にしたい授業改善を図り、「思考・判断・表現」を育成する。
- (5) 各学校においては自校の結果についての分析を行い、それに基づいた「授業改善プラン」を作成し、日々の授業改善を図る。授業改善の視点として、ICT機器やデジタル教材の効果的な活用や言語活動の充実が挙げられる。
- (6) 区全体の調査結果は、中野区教育委員会ホームページ上で公開する。なお、小・中学校に共通する課題についても検討し、その解決策を研修会等で提示する。

7 具体的な指導の工夫

- (1) 基礎的・基本的な「知識・技能」の習得については、ICT機器やデジタル教材を活用して教師が児童・生徒の学習状況を把握し、一人ひとりの習熟に応じた指導を実践したり、家庭との連携を図ったりしながら、効率的に定着を図っていく。そして、学校での対面の学習では、話し合い活動など言語活動を通じた協働的な学習を重点的に行っていく。
- (2) 国語の学習では、自分の思いや考えをもち、表現する活動を設定し、交流等を通して自分の思いや考えをまとめたり、広げたりすることができるようにする。特に書くことについては、低学年から手書きとICT機器を組み合わせた多様な表現活動を多く設定することで、自分の思いや考えを伝える力を育てていく。また、読書活動も充実させ、本を読み、自分の考えをもつ、表現する習慣を身に付けさせる。
- (3) 算数・数学では、言葉や数、式、表、グラフなどを用いた思考力・判断力・表現力等を育成するために、自分の考えを形成する学習過程を重視し、問題を絵や図で表す活動や自分が考えた式を説明する活動を行い、自分の考えを整理したり、表現したりする力を育成する。また、友達の考えを聞く活動を設定し、考えを広げたり、深めたりできるようにする。
- (4) 今回の調査で課題として挙げている、小学校3・4年生の国語、小学校4・5年生の算数の学習の定着に向けて、担任だけでなく任期付短時間教員等を活用して一人ひとりの学習を丁寧に支援したり、放課後学習の際にも、課題となる学年、教科の学習を中心に行ったりし、基礎的・基本的な知識及び技能等の育成に努める。
- (5) ICT等を活用してそれぞれの意見や考えを交流する活動を取り入れるなど、新型コロナウイルス感染症の影響で活動が制限された中でも、充実した協働的な学習が進められるよう、ICTの活用を工夫、改善していく。

別紙

1 国語科



【調査結果の分析】⇒「言葉がもつよさを認識し、自分の思いや考えを伝え合う力の育成が必要である」

◆結果

- ・中学校3年生では、全ての観点で目標値に達した児童・生徒の割合が70%を超えた。小中9年間を通じて、国語の力を身に付けていくことができている。
- ・「読むこと」については、小学校3年生から中学校3年生まで目標値に達した児童・生徒の割合が70%を超えた。物語や説明文の内容を読み取る力が身に付いている。
- ・「言葉の特徴や使い方」「伝統的な言語文化と国語の特質」については、漢字や語句などの達成率が全体的に高く、漢字や言葉の定着や語彙が豊かになってきていることがうかがえるが、主語と述語、修飾と被修飾との関係、ローマ字についての達成率が若干低い傾向があり、達成率70%を下回っている学年がある。
- ・「書くこと」に関する問題については、小学校2年生から5年生において、達成率が70%を下回っている。
- ・「情報の扱い方」については、小学校2年生、4年生、5年生、中学校1年生で達成率70%を下回っている。

◆課題

- ・「書くこと」に関する達成率が小学校2年生から5年生で目標値を下回っており、中でも無解答が、小学校2年生では19.4%、小学校3年生から5年生においては20%を超えていた。自分の思いや考えなどを書くことへの抵抗感がある児童が多くいる。
- ・情報と情報との関係を捉えて理解したり、文章を読んで理解した情報と自分のもつ情報との関係を明確にして、自分の考えをまとめていくことが不十分である。
- ・文や文章の構成に関する事項を定着が不十分である。

<領域ごとの達成率>

	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
言葉の特徴や使い方に関する事項	83.9	76.6	69.2	65.5	78.7	69.9		
情報の扱い方に関する事項	64.1	81.4	68.3	63.6	77.4	59.7		
我が国の言語文化に関する事項	61.0		75.0	89.2	62.2	69.0		
話すこと・聞くこと	67.9	70.0	93.9	60.8	89.8	57.0	86.1	90.9
書くこと	63.2	58.9	52.6	64.7	73.6	78.5	84.2	80.4
読むこと	67.8	78.7	77.3	80.1	73.7	70.7	85.2	77.1
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項							70.7	78.4

※ 小学校2年生～中学校1年生は、新学習指導要領の施行に伴い、評価の観点が変更になっている。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

<課題となる小問>

学年	解答形式	観点	領域	出題のねらい	正答率	目標値	無答率
小2	記述	思考・判断・表現	書くこと	自分の思いや考えが明確になるように、文章を書いている	37.6	45.0	19.4
小3	記述	思考・判断・表現	書くこと	経験したことから書くことを見付け、文章を書いている	66.0	80.0	25.9
小4	記述	思考・判断・表現	書くこと	内容の中心を明確にし、自分の考えを書いている	51.0	60.0	23.9
小5	記述	思考・判断・表現	話すこと・聞くこと	意見の共通点に着目して、考えをまとめている	32.6	40.0	18.1
小6	選択	思考・判断・表現	我が国の言語文化に関する事項	漢字の由来について理解している	62.2	50.0	0.6
中1	選択	知識・技能	話すこと・聞くこと	話し手の目的に応じて、話の内容をとらえている	47.2	55.0	1.3
中2	記述	書く能力	書くこと	文章の内容を正確にとらえ、伝えたい事柄を明確にして書くことができる	43.2	45.0	12.1
中3	記述	書く能力	書くこと	書いた手紙を読み返し、適切な表現に書き直すことができる	37.2	45.0	1.6

※ 達成率は領域ごとに設定されているため、課題となる小問は正答率と無答率で分析を行っている。

◆課題への対応

- ・「書くこと」については、小学校低学年から書くことに対する抵抗感をなくすよう、系統的・段階的に指導を進めることが求められる。また、日常的に子どもたちの書きたいという意欲を高めたり、相手や目的を意識して、経験したことや想像したことの中から書きたいことを決めて文章を書いたりする体験を継続的にさせることが必要である。
- ・「書くこと」の取組を行う際に、「時間や順序などに気を付けて」「様子や気持ちがよくわかるように」「理由を明確にして」「自分の意見とその理由を区別して」のように視点を明確にして、日常的に思いや考えを伝え合うことで、思考力・判断力・表現力等を高めていくことが必要である。
- ・互いの文章を読み合う活動を通して、自分の文章の良さに気付いたり、考えを広げたりまとめたりできるように一人1台タブレットやICT等を活用するなど、指導法の改善について指導・助言を研修等を通して行っていく。
- ・「言葉の特徴や使い方」については、おまかせ教室や東京ベーシック・ドリル等を活用して一人ひとりに合わせた個別学習を家庭学習と関連付けて進めたり、身に付けた文や文章の構成に関することを他教科の学習でも意図的・計画的に生かすなど、様々な場面で活用することで定着を図っていく。

【参考】

		話す・聞く力		書く力		読む力		語についての知識・理解・技能		知識・技能	思考・判断・表現
年度		H31	R2	H31	R2	H31	R2	H31	R2	R3	R3
小学校	2年生	72.0	75.5	55.6	57.0	59.4	71.1	80.8	86.2	80.5	65.9
	3年生	71.1	84.4	66.9	78.2	74.9	83.3	84.7	84.8	73.3	66.9
	4年生	61.7	70.4	64.7	73.6	68.4	75.2	69.4	77.0	71.9	61.0
	5年生	71.5	77.8	76.3	80.3	81.2	85.5	72.2	69.8	70.1	67.9
	6年生	73.1	76.3	81.2	85.1	68.5	72.2	79.0	78.5	78.7	71.7
中学校	1年生	64.4	77.5	77.0	84.2	72.4	76.4	70.3	69.8	69.8	74.7

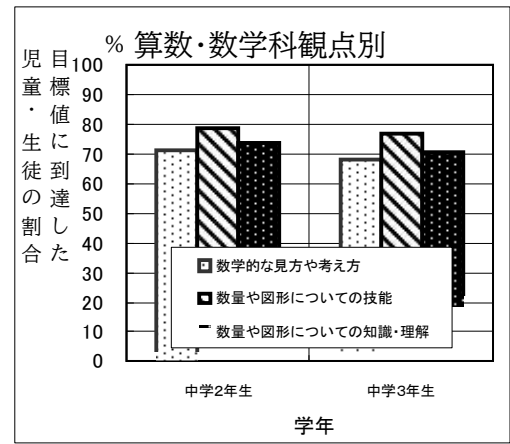
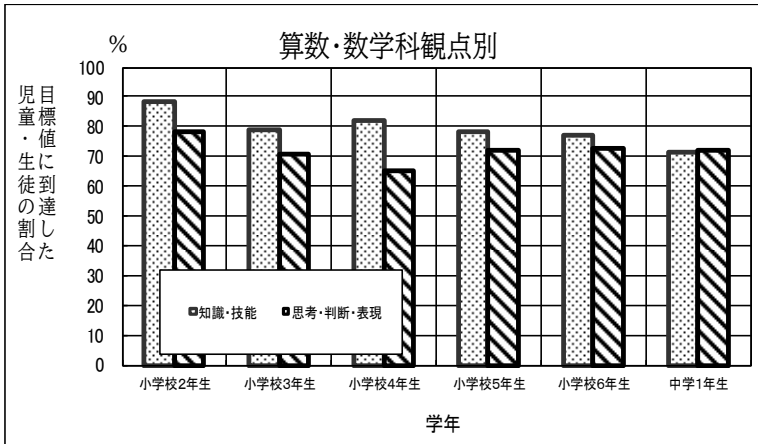
		話す・聞く力			書く力			読む力			言語についての知識・理解・技能		
年度		H31	R2	R3	H31	R2	R3	H31	R2	R3	H31	R2	R3
中学校	2年生	75.0	83.1	81.2	79.5	81.6	82.7	75.2	79.8	81.0	62.5	69.4	68.2
	3年生	88.4	89.1	90.9	76.0	82.4	79.6	72.5	78.9	77.5	72.6	79.0	77.3

※ 小学校2年生～中学校1年生は、新学習指導要領の施行に伴い、評価の観点が変更になっている。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

※ 太字・斜体は、平成31年度を上回ったものを示している。(令和2年度は実施時期が異なるため比較対象としない。)

2 算数・数学科



【調査結果の分析】⇒「式・表・グラフの関連性に着目し、事象を多角的に考察する力の育成が必要である」

◆結果

- ・目標値に到達した児童・生徒が70%未満であった項目は、小学校で平成31年度の0項目から1項目（4年思考・判断・表現）に、中学校で平成31年度の4項目から1項目（3年数学的な見方や考え方）になった。
- ・小学校の領域別では、「数と計算」は全学年で目標値到達率70%以上であった。70%を下回る領域は、「図形」2・4年、「測定」2年、「変化と関数」6年、「データの活用」3・5年であった。
- ・中学校の領域別では、「数と式」（1年は「数と計算」）と「図形」は全学年で目標値到達率70%以上であった。70%を下回る領域は、「関数」（1年は「変化と関係」）1・2年、「資料の活用」2・3年であった。特に1年「変化と関係」の達成率が低く、60%を下回った。

◆課題

- ・小学校高学年の「変化と関係」の中でも、単位量あたりの大きさや比例・反比例の定着が十分でなく、中学校の関数領域の理解が深まっていない傾向がある。特にグラフに関する理解が不十分である。
- ・小学校の「図形」は、図形を構成する要素の関係についての理解が深まっていない傾向がある。特に、正三角形や二等辺三角形の辺の長さの相等や角の大きさの相等に着目して図形をとらえることが必要である。
- ・中学校1年生で学習する「資料の活用」の基礎的な内容が定着が改善されていない。引き続き、用語の意味を正しく理解し表現する際にその用語を活用できるようにすること、データやグラフを読み取る力を付けることなどが必要である。

<領域ごとの達成率>

	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
数と計算、数と式	84.7	82.8	80.9	75.8	76.5	70.3	78.8	76.0
図形	69.7	77.2	65.6	75.1	77.7	78.4	75.0	76.9
測定	69.5	79.1						
変化と関係、関数			81.2	75.0	63.0	58.8	64.4	71.5
データの活用、資料の活用	78.8	69.8	90.0	67.5	76.6	72.7	65.5	68.2

※ 小学校2年生～中学校1年生は、新学習指導要領の施行に伴い、評価の観点が変更になっている。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

<課題となる小問>

学年	解答形式	観点	領域	出題のねらい	正答率	目標値	無答率
小2	短答	知識・技能	図形	かたち	60.9	65.0	12.9
小3	短答	知識・技能	データの活用	ひょうやグラフ	72.4	80.0	21.5
小4	選択	知識・技能	図形	円と球・三角形	60.8	50.0	4.0
小5	選択	知識・技能	データの活用	折れ線グラフと表	62.8	60.0	3.9
小6	記述	思考・判断・表現	変化と関係	割合	21.2	25.0	15.5
中1	選択	知識・技能	変化と関係	比と比例・反比例	45.8	45.0	4.6
中2	短答	数量や図形などについての知識・理解	資料の活用	資料の散らばりと代表値	44.3	60.0	10.3
中3	選択	知識・理解	資料の活用	確率	69.5	70.0	2.2

◆課題への対応

- ・全小・中学校で実施している習熟度別少人数指導において、児童・生徒一人ひとりの課題を把握し、個に応じた指導を充実させ、児童・生徒が自ら問題を解決しようとする意欲や能力を高める。
- ・関数領域の基礎力・活用力を高めるために、式・表・グラフを常に関連付けて考えられるような授業を展開し、多様な見方や考え方ができる力を育成する。
- ・データの活用領域では、ICTを積極的に活用し、表やグラフなどのデータを分析したり、自分でグラフを作成する活動を取り入れた授業を展開し、考え方を交流させながら統計的な見方を身に付けさせる。

【参考】

		数学的な考え方		数量や図形についての技能		数量や図形についての知識・理解		知識・技能	思考・判断・表現
年度		H31	R2	H31	R2	H31	R2	R3	R3
小学校	2年生	75.7	82.6	86.0	91.3	81.6	86.8	88.4	78.1
	3年生	74.5	79.1	80.3	85.6	80.1	79.6	79.1	70.9
	4年生	78.2	74.7	79.1	80.6	83.4	84.2	82.3	65.0
	5年生	74.0	78.6	78.1	80.0	72.2	76.5	78.4	72.2
	6年生	75.9	74.8	76.7	73.8	76.4	75.4	77.1	72.6
中学校	1年生	68.4	71.2	71.8	76.1	72.0	71.4	71.5	71.9

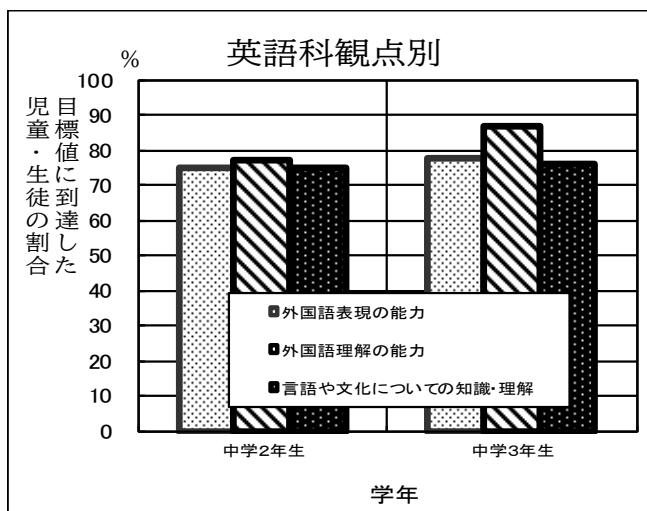
		数学的な見方や考え方			数量や図形についての技能			数量や図形についての知識・理解		
年度		H31	R2	R3	H31	R2	R3	H31	R2	R3
中学校	2年生	59.9	64.9	71.4	71.0	80.1	78.7	66.2	65.2	73.6
	3年生	71.2	69.0	68.0	74.7	79.3	77.0	68.4	70.5	70.6

※ 小学校2年生～中学校1年生は、新学習指導要領の施行に伴い、評価の観点が変更になっている。

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

※ 太字・斜体は、平成31年度を上回ったものを示している。(令和2年度は実施時期が異なるため比較対象としない。)

3 英語科



【調査結果の分析】⇒「言語活動を繰り返す中で基礎的な学習内容の定着を図ることが必要である」

◆結果

・観点別達成率

2年生は各観点とも一昨年度と比較して8ポイント程度上昇し、70%を大幅に上回っている。
3年生は各観点とも一昨年度と比較して4ポイント程度上昇し、70%を大幅に上回っている。

・領域別達成率

「聞くこと」2年生 78.5%、3年生 89.9%（同一母集団経年比 7.6ポイント増）

「読むこと」2年生 69.0%、3年生 79.3%（同一母集団経年比 7.7ポイント増）

「書くこと」2年生 74.8%、3年生 81.0%（同一母集団経年比 4.1ポイント増）

2年生については、「読むこと」の領域で達成率が70.0%を下回った。

3年生については、同一母集団の経年比較において、各領域で大幅な上昇が見られることから、言語活動を中心に据えた授業の成果が出ていると考えられる。

- ・2年生では、「言語や文化についての知識・理解」の観点において、「語形・語法を理解することができる。（一般動詞過去の疑問文）」及び「単語を正しく書くことができる。（春）」という問題の正答率が低かった。

- ・3年生では「言語や文化についての知識・理解」の観点において、「語形・語法を理解することができる。（動名詞の形）」また「外国語表現の能力」の観点において、「英語でたずねる文を書くことができる。（相手に車の値段をたずねる）」という問題の正答率が低かった。

◆課題

- ・「語形・語法を理解する」及び「単語を正しく書く」など知識・理解の定着が不十分な部分が見られる。
- ・「英語でたずねる文を書く」など英語で解答・表現する力が不十分な部分が見られる。
- ・小学校からの積み重ねの部分など基礎的・基本的な内容が定着しておらず英語を苦手とする層が見られる。

<領域ごとの達成率>

	中2	中3
聞くこと	78.5	89.9
読むこと	69.0	79.3
書くこと	74.8	81.0

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

<課題となる小問>

学年	解答形式	観点	領域	出題のねらい	正答率	目標値	無答率
中2	選択	言語や文化についての知識・理解	読むこと	語形・語法の知識・理解	45.5	45.0	0.6
中3	記述	外国語表現の能力	書くこと	場面に応じて書く英作文	36.5	35.0	12.7

◆課題への対応

- ・日々の授業において、パターンプラクティスやスモールトークなどのコミュニケーション活動を豊富に取り入れながら、基礎的な学習内容のインプットを図るとともに、重要表現を繰り返しアウトプットさせるなど、日常的に活用させる。
- ・具体的な場面や状況に合った適切な表現を考えたり、話したりする言語活動の充実に加えて、英語を用いて書く学習活動を意図的・計画的に取り入れる。
- ・小学校の外国語及び外国語活動と中学校の英語との連携を図り、小・中学校の教員同士が共通理解の基に指導を行うことで、相乗効果を生み出せるようにする。
- ・オールイングリッシュによる授業を実施するとともに、教師やALTの使用する英語が生徒にとって効果的なインプットとなるよう工夫する。
- ・ICTを活用し、教科書の範読等をデジタル教科書で行い、教師が生徒の学習状況を把握しやすくすることで、一人ひとりの習熟に応じた指導を実践する。

【参考】

		外国語表現の能力			外国語理解の能力			言語や文化についての知識・理解		
年度		H31	R2	R3	H31	R2	R3	H31	R2	R3
中学校	2年生	67.7	77.5	74.9	69.8	80.0	77.1	67.7	75.7	75.0
	3年生	74.7	79.3	77.6	82.5	88.2	86.5	72.5	80.0	76.2

※ 網掛けの数値は目標値に到達した児童・生徒が70%以上の項目を示している。

※ 太字・斜体は、平成31年度を上回ったものを示している。(令和2年度は実施時期が異なるため比較対象としない。)